生きて

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）⑦

サラリーマン時代　恩師の紹介で出版社も

広島大を卒業した1965年春、広島市の蔵田金属工業に就職する

卒業間際に中国新聞の「新人登壇文芸作品募集」で2位に入ったことで作家への夢は強まったのですが、たちまち食べていかなければなりません。作家への思いを膨らませつつ就職したのが当時、紙屋町（現中区）にあった蔵田金属工業でした。現在のキーレックス（海田町）という会社です。東洋工業（現マツダ）の1次下請けで、自動車部品とともに建築資材も造っていました。

最初は人事課でしたが、「文章が書ける」ということで2年目から秘書課に配属され、主に社内報作りに携わりました。

ですが、2年あまりで退社しました。同期社員から会社への不満を聞き、私は「団体交渉すればいいじゃないか」と助言してしまったのです。当時は労働組合の活動が激しく、経営陣は神経をとがらせていました。秘書室にいながらそんな発言をしたものですから、問題になったようです。

大学時代に続き、就職後も深い縁が続いた松元先生

作家の道もあると考えていたので、それほど不安もなく会社を辞め、川尻（現呉市）の実家に戻りました。

その後、広島大時代の友人の紹介で、広島市内の会員制のレストランや医療器具メーカーを転々とし、70年、観音本町（現西区）にあった文化評論出版社に落ち着く

この会社を紹介してくださったのも、広島大時代の恩師、松元寛先生です。100万部のベストセラーとなった先生の高校生向け英語参考書「チェックグラマー」を出版した会社です。元は本通り（中区）辺りにあったのですが、私が入社した頃には既に創業者は亡くなっており、奥さんと2人の息子さんが、こぢんまりと事業を続けていました。

私は編集も手伝いつつ、九州の高校を中心に参考書や問題集の売り込みに回りました。一つの学校と取引が始まれば全学年で使ってもらえ、まとまった数が出るのです。

少し下火になっていたとはいえ、「チェックグラマー」は依然稼ぎ頭で、ここでも松元先生とのご縁を感じることになりました。

◇

次回は2月2日に掲載します。

生きて

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）⑧

夢の変化　作家への道 限界を意識

企業を転々としたのは、学生時代から抱いていた作家への夢がくすぶり続けていたこともあります。

社会人1年生となった1965年には、小説の書き方を教えてくれた広高（呉市）時代の恩師山碕雄一先生に誘われ、同人誌「文都広島」の責任者として編集に携わった

「文都広島」は広高文芸部出身者を中心に20人ほどが同人となり、年2回発行しました。私もほぼ毎号、作品を発表していました。私は代表も任されていて、会社が引けた後、八丁堀（現広島市中区）の歩道で立ち売りしたこともあります。しかし、徐々に投稿者の固定化、マンネリ化が進み、71年に解散します。

翌年には、個人で「奎文（けいぶん）」という文芸誌を創刊しましたが、これも3巻で終えてしまいました。

「文都広島」では初めて長編小説にも挑戦したのですが、山碕先生に「何書いとるんか分からん」と酷評されたことがあります。その頃から、能力の限界を意識するようになりました。ただ、「文化的で、社会を潤す活動を続けたい」との思いはくすぶり続けました。広島大時代の恩師、松元寛先生がかつて口にされた「広島は文化不毛地帯」という言葉が引っ掛かっていたからです。

サラリーマン時代に携わった同人誌「文都広島」と「奎文」

松元先生の紹介で文化評論出版社に勤め、業界について学べたこともあり、出版社が自分の思いに合致するように感じ始めていました。

そんな折、大学時代の友人から「自分が立ち上げた会社を引き継いでくれないか」と持ち掛けられました。岡山市の日本文教出版が発行する「岡山文庫」を参考にして、数年前に千田町（中区）で起こした広島文化出版という会社でした。

購読会員を募り、自社製作の新書判の本を定期的に送る個人経営の出版社で、彼は既に1500人の会員を集め、発行も始めていました。

安芸門徒や神楽、方言、酒、原爆資料などを毎号取り上げる教養シリーズで、内容には共感できたのですが、テーマを広島に絞っていたため、将来のネタ切れが心配になりました。

結局、この話は断りましたが、失敗したとはいえ、出版社を立ち上げたその友人の志と行動力には強く刺激されました。

生きて

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）⑨

起業　妹からの50万円元手に

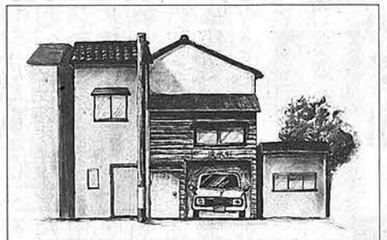
1974年夏、4年間勤めた文化評論出版社を退職する

出版社を設立するための退職でした。しかし、企業経営の知識などありません。最初は広島市内で、依頼者と印刷業者の間に入って利ざやを稼ぐブローカーのようなことをしました。顧客になってくれたのは、大学卒業後、最初に勤めた蔵田金属工業の元上司です。名刺や伝票など会社の印刷物を注文してくれました。

「株式会社溪水社」が誕生したのは75年2月でした。登記のきっかけは、その蔵田の元上司からの要請でした。「個人名の領収書だと税務署が信用しないので困る」と言うのです。それまで領収書は、私個人の名前と印鑑で出していました。

ただ、私には資本金に回せる蓄えはなく、妹から50万円を借りました。事務所は、妹夫婦が暮らしていた小町（現中区）の自宅の一角を借りることにしました。現在の会社の200㍍ほど南です。

敷地内にあった駐車場を壊し、解体業者から譲ってもらった廃材を使って、中二階式の事務所兼駐車場を妹婿と建てました。中二階に置いた事務所は、20平方㍍にも満たない狭い空間でした。なるべくお金をかけまいと自分たちで工事したのですが、50万円はすぐなくなりました。



中央の建物が創業当時の溪水社社屋　（画・西岡真奈美）

初めて出版したのは、エリザベト音楽大の石川正司先生から依頼された音楽教本「バッハ、インヴェンションとシンフォニア」だった

石川先生を紹介してくださったのは、文化評論出版社時代に知り合った広島大教育学部の野地潤家先生です。ただ、この本を作るのはとても苦労しました。文章の間に短い楽譜が300カ所近く挿入されていたからです。

今は楽譜も簡単にパソコンで作成できますが、当時は鉛の活字を組む活版印刷の時代です。五線譜や音譜が刷れる印刷所は広島になく、楽譜部分だけを専門に請け負う東京の業者に委託しました。そこで刷り終えた1冊約200㌘、計千冊分のA4判用紙を広島の印刷会社に持ち込み、残りの白紙部分に文章をはめ込むように印刷してもらうのです。

両社が刷る位置に寸分の狂いがあってもいけません。事前のレイアウトだけで1カ月以上を要しました。